

人物で語る 日本デンマーク

⑦ 岡田菊次郎Ⅱ

岡田菊次郎は、行政の長（村長、町長など）や農業機関の長（町農会長、郡農会長、郡園芸組合連合会長、県農会議員など）として日本デンマーク農業の発展に尽くすことになる。代表的な二つの業績を見ていくことにしよう。一つ目は、山崎延吉の提唱した多角形農業を推進したことが挙げられる。多角形農業とは、米のほかに養蚕、養鶏を加えて三角形農業、それに野菜を加えて四角形農業、さらに果樹を加えれば五角形農業などと言われ、いわゆる農家の収入の安定化を図るために経営の多角化を図ることであった。菊次郎は、十数か町村の農会を組織した郡農会と六、七十地区の産業組合を組織した郡産業組合連合会をうまく連携させて、それぞれの組織の力を十二分に発揮できるよう努めた。それが農産物の量産と共同販売への道を切り開くことになったのである。さらに、多角形農業の最終段階としての加工の分野においても、トマト・すいか・若鶏を加工してケチャップ・スイカ

糖・若鶏味醂漬けなどを作り販売する三河食品株式会社を、一九二九年（昭和四年）に設立させている。これらのことから多角形農業は、日本デンマーク農業の中核として全国的に知られたることになった。

二つ目は、農業関係の研究・指導機関を誘致したことが挙げられる。その中で、農事試験場の誘致を見ていくことにする。

県の農事試験場の本場は尾張の清洲にあったが、種芸部だけが現明治本町の農商務省農事試験場東海支場跡地にあった。一九〇五年（明治三八年）山崎延吉が農林学校長と兼職で農事試験場長に就任したことから、安城への誘致運動が動き出すことになる。東海支場跡地では狭すぎるというので、当時村長だった岡田菊次郎に山崎から敷地場所の選定の相談があったからである。菊次郎は、農林学校の北西五百メートルほどの場所を選んだ。こ



▲多角形農業の一角ナシ

こは、すぐ横を明治用水中井筋が通っている場所であった。土地買収の費用は、菊次郎の尽力で郡農会と町農会とが折半して出し、郡農会から県に無償提供することにしたという。そして、一九一三年（大正二年）に種芸部が移転し、一九二〇年（大正九年）にはすべての機能が清洲から移り安

城が本場となった。

ここには、種芸部（「愛知旭」を育成）のほかには園芸部、農芸化学部、畜産部（養鶏の普及）、養蚕部、農具部（動力脱穀機の製作）の合わせて六部が置かれた。そして、各種試験研究が行われた。なお、安城町農会などが主催する講習会に試験場の技師が出掛けて指導に当たったことから、近代的な農業技術の普及が図られた。

後にできた種鶏場を加えて、農林学校、農事試験場という一連の農業研究指導機関を安城町に誘致したことが、この地域をして、日本デンマーク地帯と言われる基になったといえよう。岡田菊次郎の政治家としての手腕がいかに優れていたかが感じられる。

文 星野光俊



▲池浦町にある県農業総合試験場(前農事試験場)